

# 『ゲーム極道』

【梗概】

十年の刑期を終えてシヤバに出てきた武闘派ヤクザの島田組若頭・一樹（36）が目にしたのはヤクザのシノギの王道と言えるヤミ金や風俗や薬物といった違法性の高い分稼ぎも大きい仕事をヤクザの生存競争の中で他の組に奪われ、生産数の少ないゲーム機や限定アニメグッズの転売をシノギとする島田組と、その現状を特に問題視することなく日がな一日テレビゲームに熱中する親分・島田の姿であった。

理想とするヤクザ像から大きく離れた組や島田に当惑し、憤慨し、落胆もする一樹だったが、島田の命令でゲームをやらされているうちに少しずつゲームが面白くなってくる。だが、そんな折、転売用商品の仕入れのために家電量販店に並んでいた島田組組員・隆（29）と半グレの末端構成員・瀧と瀬川（26）が店頭で殴り合いの喧嘩を起こしてしまう。相手が暴力団ではないことから警察

に一方的に罪を着せられた隆を見て憤慨した一樹は兄弟分の佐竹組組員・信太郎（36）から瀧の居所を聞き出し、報復のために彼を訪ねるが、その怯えた表情に暴力的な父親に怯えていたかつての自分と同じものを見出し、手は出さずに帰る。

しかし今度は瀧と瀬川が報復のためか島田組の名を騙った暴行・脅迫事件を起こし、再び罪を着せられた組は警察からは転売用の仕事道具を押収され、上部組織の誠心会会長・村瀬（70）やその右腕の佐竹組組長・佐竹（49）からは瀧と瀬川に報復するよう圧力をかけられ、窮地に立たされる。

島田は組の解散と、瀧と瀬川への単独報復を決意する。血の気の多い一樹には部屋でゲームをしているよう命令し、他の組員たちには警察に提出する証拠として犯行に至るまでを記録した自らのライブ配信動画を見せ、瀧と瀬川を襲撃した島田は、目論見通り反撃を食らって刺し殺されるのであった。

三ヶ月後。組を解散し、ゲーム実況やeスポーツを事業内容とする小さな会社を島田組の面々と立ち上げた一樹は、通りかかった公園でひとりぼっちの虐待児童と出会う。一樹は虐待児童の女兒にスマホを渡し、二人で一緒にゲームをする。自分がかつて島田に救われたように、今度は別の子供を、ゲームで救おうとするのだった。

○刑務所・正門前

門から少し離れたところに停まっている黒塗りの乗用車の助手席で、島田組組員・健児（21）がスマートフォンのパズルゲームをやっている。

サイドウィンドウを叩く音がして、見ると、島田組組員・岡崎（32）がいる。パワーウィンドウを下げる隆。

岡崎「いつまでゲームやってんだよ。もう一樹兄さん出てくるよ」

健児「すいません」

岡崎「お前までゲームばっかやりやがって」  
健児「すいません」

車を降りる健児。岡崎と共に正門前で歩いて行くと、そこに小野寺が背筋をピンと伸ばして立っている。

岡崎と健児もその横に並ぶ。

小野寺「健児、お前こういうの初めてか」

健児「そっすね」

小野寺「そっすねじゃねえよ馬鹿野郎。そう

です。ねだろ。うお前。敬語は社会の基本だろ  
うが。学校で何学んで来たんだよ」

健児「いや自分学校は……」

岡崎「カシラ！ お勤め、ご苦労様です！」

健児・小野寺「お勤めご苦労様です！」

頭を下げる三人の前に、刑務所から

出てきた島田組若頭・一樹（36）が  
立つ。

一樹、しばらく三人を無表情に見てい  
るが、やがて笑顔を浮かべながらボク  
シングの構えを取って、ふざけて岡崎  
たちを殴るふりをする。

岡崎「（よけて）おお、鈍ってませんね」

一樹「元気にしてたか？ ええ？」

岡崎「それこっちの台詞じゃないですか」

一樹「バカお前元気に決まってるじゃねえか。

こんな肥溜めでくたばる俺じゃねえわ。

ビンビンに溜まってるぜお前」

岡崎「女、手配しときますんで」

小野寺、涙ぐんで、

小野寺「カシラ……どうも本当によく……」

一樹「小野寺、そんな顔するなよ。たかが十年だろう。お前も変わってねえな」

小野寺「いや、それが……」

岡崎「まあまあまあ、積もる話は後にして、とりあえず帰りましょう」

一樹「おう、そうだな」

車に向かって歩き出す三人。

一樹「お前は？ 新しく入ったのか」

健児「あ、はい。隆さんの紹介で……」

一樹「おー、そういえば隆は」

小野寺「（遮り）健児！ ちゃんと挨拶ぐらいしろ！」

一樹「いいよいいよ。な。健児か。まあお前もそのうちな、たつぷり痛い目遭って礼儀の大切さが分かるから。経済ヤクザだのインテリヤクザだの言うけどよ、この世界やっぱり拳だよ。拳と度胸が物を言うからな……なんか足りねえな」

立ち止まる四人。

一樹「おい、タバコは？」

気まずそうな顔をする岡崎たち。

一樹「タバコ。持ってるだろ？」

岡崎「あの、カシラ、そのですね、大変言いにくいんですが、親分の命令で」

一樹「命令？」

岡崎「値上げでタバコ代もバカにならなくなつたんで、タバコは吸うなと」

小野寺「禁煙させられました」

沈黙。無表情に三人を見る一樹。

その後、一樹は笑い出す。

## ○島田組事務所

応接セットのソファーに退屈そうに座っている一樹。

室内を見渡すと、至る所にダンボールや物の入った折り畳みコンテナが置かれ、倉庫のようになっていた。

デスクの上にはモニターに接続された様々なゲーム機と、その絡まった配線。



室内は静かで岡崎がパソコンをいじっている音だけが聞こえる。

タバコを取り出して火をつける一樹。

一樹「岡崎、みんなどこ行ったの」

岡崎「ちよつとシノギの都合で」

一樹「あそう」

沈黙。

一樹「岡崎、なんかやることねえの」

岡崎「あー、ゲームならありますけど。何や

ります？ コール・オブ・シューター、

ナインクロフト、ハニ森とかも」

一樹「（遮って）ちよちよちよ、ゲームじゃ

ねえだろ。お前俺が何のためにくせえ飯

食ってきたと思ってるんだよ。組だろ？

それをお前……なんだそもそもお前、これ。

このザマは。え？ これじゃ借金取りじゃ

なくて借金する方の部屋だろ」

岡崎「いや、あのう、ヤミ金もうやってない

んですよね」

一樹「は？ じゃお前シノギどうしてんの。」

シヤブ？ マリファナ？ 風呂？」

岡崎「そういうのはデカイ組が独占しちゃってるんで、ウチみたいな小さい組は……」

一樹「は？」

岡崎に詰め寄る一樹。

一樹「ウチみたいな小さい組だ？ 誰がお前その小さい組のために身体張ったと思ってるんだ、ああ！？」

岡崎「いや、カシラ、あのですね、その、親分から……」

一樹「テメエのシノギ奪われたらタマ取っても奪い返せや！ テメエ極道だろうが！ 呑気にパソコンなんか見てる場合じゃねえだろ！」

パソコン画面を見る一樹。そこにはネットオークションの最新ゲーム機の出品ページが映っている。

岡崎「これが今のシノギなんですよ」

困惑して岡崎を見る一樹。

## ○大通り

フードデリバリーのリュックを背負ってスポーツタイプ。の自転車に乗った島田組組員・隆（29）が信号で止まって電話している。

隆「勘弁して下さいよ、沿線だったって何駅離れてると思ってんすかあ。はいはい、行きますよ、はい行きます」

信号が青になって隆は自転車を飛ばす。岡崎N「ゲームとかアニメグッズの転売です。数量限定とか、流通数が少ないのを買ってきてオークションサイトで売るんですよ」

## ○秋葉原・アニメグッズ店

アニメグッズで身を固めた女性ファンたちが和気藹々と話しながら店の前に並んでいる。

そこに隆が自転車でやってきて、息を切らしながら自転車を歩道に停めると、列に加わる。

女性ファン1「（小声）うわなにあれ」  
女性2「（小声）絶対転売ヤーじゃん」

○路上駐車ワゴン車の中

助手席の小野寺が様々な家電量販店を  
回って取ってきた最新ゲーム機やゲー  
ムソフトの販売抽選券を手にして見て  
いる。運転席の健児がスマホで当選番  
号を読み上げる。

健児「新宿、22505」

小野寺「22505……外れ」

健児「渋谷、00337」

小野寺「00337……外れ」

健児「川越、10859」

小野寺「10859……当たっちゃったよ。

なんでこのへんの店舗で当たってくれない  
かなあ。川越って」

○島田組事務所

岡崎の目を見る一樹。

一樹「ダフ屋じゃねえか」

岡崎「ええ、まあ、でもこっちの転売の方はチケットと違って条例違反にならないんですよ。ネットオークションですしね」

一樹「馬鹿野郎！俺が言ってるのはそういうことじゃねえんだよ！」

タバコを床に投げ捨て、荒々しく事務所を出て行く一樹。

岡崎「カシラ、どちらへ……」

一樹「親父に挨拶だよ！」

## ○島田邸・外

40坪、4LDKほどの何の変哲も無い戸建て住宅。その表札に「島田」。

一樹が玄関ベルをイライラと何度も押しているが、なかなか人が出てこない。

やがて、インターホンに島田の妻・

祥子（51）が出る。

祥子の声「はい」

一樹「あ、どうも、お久しぶりです」

祥子の声「一樹くん？」

一樹「はい、あの、無事、本日、出所致しました」

玄関ドアを開けて祥子が出てくる。

祥子「あらー、ちよっとー、ずいぶん大人っぽくなったじゃない」

一樹の腕や肩を触る祥子。

一樹「どうも、ははは。大人になりました」

祥子「あの人なにも言わないんだから。ご飯

準備してないけど、何か食べてく？ あ、

ピザ取ろっか？」

一樹「あいや、そういうのはいいんで、あの、親分に挨拶を」

### ○島田邸・島田の部屋

ドアをノックして一樹が入ってくる。

一樹「失礼します」

デスクチェアに組長・島田（56）が座っているが、デスクに置かれた大きなモニターに隠れてその上半身は一樹

から見えない。

頭を下げる一樹。

一樹「長い間、組空けてご迷惑お掛け致しました。俺がいない間にあいつら随分腑抜けやがったみたいで、これも俺の責任です。また今日から俺が組引っ張っていきますんで、またよろしくお願いします」

無言の島田。

一樹「親分？」

そろりと数歩踏み出して、デスクの側方に回る一樹。モニターに隠れていた島田の上半身が見え、ヘッドセットを付けて無線コントローラーを握り、FPSゲームに熱中しているその姿が目に入る。

啞然とする一樹。

一樹「親分？」

島田、突然一樹に気付いて、驚いて椅子からずり落ちる。

島田「おおお！」

一樹「だ、大丈夫ですか？」

ヘッドセットを取る島田。

島田「びっくりさせんなよ一樹お前！ 入る

ときは一声かけろよ！」

一樹「いや、あの……すいません」

モニターを見る島田。コントローラーから手を離している間に島田の操作するキャラクターは死んでいる。

島田「勝てるどころだったのに負けちゃったじゃねえかよ……今期のリーグはティアワン狙ってたぞこっちは」

困惑した表情の一樹。

× × ×

今度は都市建設シミュレーションゲームをやっている島田。

一樹はそれを横で見ている。

島田「もうすぐ人口15万人に行くところなんだが、そろそろゴミ問題が出てきてな。これがなかなか厄介なんだ。インフラってえのは複雑に絡み合ってる。単独じゃあ機



能しねえからな」

× × ×

格闘ゲームで島田と一樹が対戦している。島田は楽しそうだが一樹は全くやる気がない。

島田のキャラが必殺技を決めて勝って、島田「おいおい、接待プレイか？ もっと楽しませてくれよお前。張り合いつてものがねえじゃねえか。健児はもっと上手えぞ」  
一樹「ムシヨにゲームないんで」  
島田「はっはっは、それもそうか」

### ○同・居間（夜）

島田と祥子、一樹が食事中。島田は箸を持ったまま携帯ゲーム機でゲームをしている。

祥子「ご飯の時ぐらいゲームやめてって言うてるでしょ」

意に介さずゲームを続ける島田。

島田「うん」

祥子「一樹くんからも言っていてよ。ずっとゲームやってるんだから」

一樹「はあ」

一樹、応接スペースに置かれた大きな観葉植物を見る。

一樹「あの、親分」

島田「なんだ」

一樹「あそこに置いてあったサンドバッグ、どうしたんですか」

島田「んー？」

一樹「サンドバッグ、置いてあったでしょう、前は」

祥子「あれね、使わないから捨てちゃった」  
不満げな表情を浮かべる一樹。

○ラブホテルの一室（夜）

ベッドに裸で仰向けになって、天井を眺めている一樹。

その傍らでデリヘル嬢の由美（31）がベッドに座ってタバコを吸っている。

一樹「ありえねえだろ。いい大人が、それもヤクザの親分が日がな一日ゲームしてるってどうなってんだよ」

由美「平和でいいじゃん」

一樹「バカ言え。武闘派で鳴らした男だぞ。だから俺もあの人についてったんだ。同じジムのOBで、あの頃の親父は……」

ため息をついて身を起こし、由美に後ろから抱きついて胸を揉む一樹。

一樹「あーちくしょう」

由美「延長になりますよー」

一樹「バカ野郎こっちは溜まってんだよ。5年でも10年でも延長してやるわ」

## ○喫茶店

佐竹組組員・古賀信太郎（36）が一樹と話している。

信太郎「そりゃあ喜んで協力するさ」

一樹「おおマジか」

信太郎「そりゃそうよ。カズっちの頼みなら

断れないさあ」

一樹「信太郎お前……お前は良い奴だなあ」

信太郎「なあに言ってるんだよ。何度も助けられたのはこっちなんだから。この世界持ちつ持たれつじゃない。ようやくカズっちに恩が返せるんだからむしろありがたいよ」

一樹「いやさあ」

信太郎「うん」

一樹「オモチヤの転売なんてよ」

信太郎「うん」

一樹「あんなもん極道のやることじゃねえ」

信太郎「うん、うん」

一樹「で、こっちに回してくれるってのは

どんなシノギなんだ」

○タピオカドリンク屋・店内

可愛らしいエプロンを着けて店員として店に立っている無表情の一樹。

目の前では女子高生グループがキヤツキヤとはしやぎながら何を頼むか話し

合っている。

### ○島田組事務所

エプロンを手に持った一樹が入ってくると、中では隆と健児が転売用のゲーム機を何台分もダンボール梱包しているところ。

岡崎はパソコンでネットオークションの相場をチェック中。

健児「ご苦労様です」

岡崎「ご苦労様です」

隆「あ、カシラ。どうもすいません昨日は行けなくて。ちよっと今月シノギの方が苦しくて」

一樹「ゴミ箱あるか」

隆「あ、はい、あちらに」

エプロンを隆に投げつける一樹。

一樹「捨てていってくれ。転売してもいいぞ」

一樹、ソファーに座ってため息を吐く。  
タバコを取り出し火をつける。

岡崎「（来て）カシラ、これ、親分から」

箱入りの新品スマホを差し出す岡崎。

一樹、それを一瞥して、ポケットから取り出したガラケーを岡崎に見せる。

一樹「スマホなんていらねえよ」

岡崎「それだと、ちよつと色々差し支えるつてのもありまして」

渋々受け取る一樹。

岡崎「あとですね」

一樹「今度はなんだ」

岡崎「親分が、家に来てくれと」

一樹「昨日行つたら」

岡崎「シノギの話があるんじゃないすかね」

一樹「じゃ自分で来ればいいじゃねえか。」

なんで親父は家でゲームばっかやってんだ。

お前ら誰か何か言わねえのか。ああ？」

組員たちの顔を見回す一樹。

誰も何も言わない。

## ○島田邸・島田の部屋

パソコンモニターに映っているのはビデオ会議アプリの画面。そこには島田組が属する指定暴力団・誠心会の会長・村瀬（70）を筆頭に、傘下の暴力団の組長や若頭たちが10人程映っており、和やかにビデオ会談をしている。その一人の佐竹組組長・佐竹（49）は猫を抱いている。

村瀬、笑顔で佐竹の猫を見ながら、  
村瀬「かわいいねえ。んん？　なんか欲しいか。マタタビいるか。女か。お父ちゃんが雌猫買ってきてやろうか」

佐竹「ありがとうございます。ちーちゃんも会長のプレゼントきつと喜ぶと思います」  
村瀬「んーそうかそうか。じゃ待ってるな」

村瀬、全員に向き直って、  
村瀬「まあ、そういうことで。あとで詳細メール送らせとくから」

組長たち「わかりました」  
島田「わかりました」

村瀬「なんだ島田、元気ないな。お前、またゲームで徹夜か？」

島田「ははは、わかりますか」

村瀬「ダメだよお前、まだ若いんだから。夜はゲームなんかやってないで嫁さん喜ばせてやらないと若いもんを取られちまうぞ」

モニター越しの組長たち、軽く笑う。

島田も愛想笑いを浮かべる。

村瀬「じゃ、またねー」

組長たち「お疲れ様です」

島田「お疲れ様です」

島田、ビデオ会議の終了ボタンを押す。座っていたゲーミングチェアの背もたれに身を任せ、独り言のように、

島田「余計なお世話だったーの」

その様子をソファーに座った一樹が呆れたような表情で眺めている。

一樹「なんすか今の」

島田「うん？　これか？　これはな、ほら、

今コロナだ何だでうるさいだろう。外で会



食なんかしようもんなら警察の格好の餌食だから、オンラインに切り替えただ。ヤクザもリモートワークの世の中なんだよ」

幻滅したような表情を浮かべる一樹。

一樹「それで、用ってなんすか」

島田「ああ、そうだった。あのな、実はお前に頼みたいことがあってな。素材を集めてもらいたいんだ」

一樹「素材……シヤブですか？」

島田、軽く笑って、

島田「そんな物騒なお前……違うよ素材だ、属性防具を作るための素材。それがねえと次のクエストのボスに勝てねえんだよ」

一樹「……ゲームの話ですか？」

島田「おお、分かってきたじゃねえか。まあちょっと面倒を押しつける形にはなるけどな、俺はちよっと別のゲームのリーグ戦があるから、その間にお前にやっというてもらいたいんだ。な。今月はどうしてもランカ―目指したいんだよ」

一樹「……」

島田、立ち上がったって一樹に近づく、

島田「ところでお前、スマホはどうした？」

一樹「（スマホ取り出し）ありますよ」

一樹に見せながらそのスマホを操作して「ウォーキング・モンスターズ」というゲームのアプリをタップする

島田。

島田「これな、まあ万歩計のゲームだな。

歩けば歩くほどモンスターが育つんだ。

俺もやってるし他の連中にもやらせてる。

お前もこれを」

一樹「（遮って）テメエいい加減にしろよ

この野郎」

空気が固まる。

島田「お前今、なんだった」

一樹「この野郎つつったんだよこの野郎。万

歩計だ？ 素材集めだ？ おかしいだろう

が。なもん極道のやることじゃねえ」

島田「テメエ、それが親に対する口の利き方

か？」

一樹「じやなかったらなんだよ。あ？ 殴ってみるよ。おい。殴って言うこと聞かせてみる。それが極道だろうが。え？」

島田が片手に握りしめたゲーム機のコントローラーをチラと見る一樹。

一樹「そのそれで殴ってみ。ほら」

島田のコントローラーを持つ手に力が入る。睨み合う二人。

島田「誰が殴るかよ」

強ばった一樹の表情が少しだけ緩む。

島田「テメエはよ、知らねえだろうがよ、今のコントローラーはファミコンのコントローラーと違って高性能だから高えんだよ。ジャイロセンサーだのブルートゥースだのタッチパッドだの色々付いてるから、純正品だったらゲーム一本買える値段なんだよ。そんな大事なものをテメエを殴るために使うわけねえだろバカ野郎！」

緩んだ表情が再び強ばり、一樹の身体

がわなわなと震える。

と、一樹はコントローラーを奪って、壁に思いきり投げつける。

島田「一樹！ お前なんてことを！」

コントローラーに駆け寄る島田。

一樹「……すいませんでした。素材集めは今晚中にやっときます……」

一樹はとぼとぼと部屋を出て行く。

### ○島田組事務所（夜）

「ソウルハンター」というゲームの攻略本を傍らに置いて、一樹が事務所のゲーム機でアクションRPGをやっている。現在おぼつかない操作でモニターと戦いながら素材集め中。

別のデスクでは岡崎がパソコンで転売関連情報を収集している。

一樹「岡崎、ちよっと、疲れたから代わってくれよ」

岡崎「すいません、明日までにやらないとい

けない仕事か溜まってて」

一樹「サラリーマンみたいなこと言いやがって。何のために極道になったんだよ」

事務所の奥でゼロテープ片手にゲーム機の箱をいじっている小野寺が笑う。

小野寺「ホントですねぇ」

一樹「お前はさつきから何やってんの」

小野寺「これですか？ これはあの、中古で仕入れたゲーム機を新品扱いで転売するために加工してるんですよ。こうやって、テープで販売店のシール剥がして」

呆れて鼻で笑う一樹。

と、固定電話に入り口からの内線。

岡崎「小野寺さん、すいませんけど出てもらえますか？」

小野寺「へい」

電話を取る小野寺。

小野寺「はい。……あ、ただいま」

小野寺、ニヤニヤしながら入り口へ

向かい、ドアを開けると、そこに由美

と同僚の薫（23）が立っている。

由美「お待たせしましたー」

小野寺「カシラ、ご指名の方が」

一樹「んー？」

岡崎「何も事務所に呼ぶことないでしょう」

由美「あれ、ここで合ってますよね？」

ゲーム内でメニュー画面を開いてプレイを一時停止し、振り返って由美と薫を見る一樹。

一樹「あー。すっかり忘れてた。悪い、急な用事入ったから帰ってくれ。また今度な」

プレイに戻る一樹。

由美「え、キャンセル料がかかりますけど」

小野寺「すいません、いくらですか」

由美「お客様事由の突発ですから全額で

四万円になります」

財布の中身を見ながら渋い顔をする

小野寺。

小野寺「三万円ですかあ……あるかなあ」

一樹、再び振り返って、

一樹「いやそれならさ、これ一緒にやってくれねえかな」

× × ×

一緒にゲームをやっている一樹と由美。傍らでは薫が攻略本を見ている。

画面の中ではモンスターにやられそうになった一樹のキャラクターを由美の操作するキャラクターが助けたところ。

一樹「あつぶね」

由美「プレイが雑」

一樹「さすが先輩」

薫「一旦アゴを下げたタイミングで右にステップして」

薫のアドバイス通りにキャラクターを操作しようとする一樹。

一樹「ステップして」

薫「そうするとその位置に火炎放射がロックされるから、アゴを上げた直後にローリングで正面に回って」

一樹「アゴを上げた直後に……あー」

由美「あー」

薫「あー」

一樹の操作キャラがモンスターにやられる。一樹、笑顔を浮かべる。

一樹「なんか楽しくなってきたな」

小野寺と岡崎が困惑したような表情で一樹を眺めている。

## ○繁華街

一樹がぶらぶら歩いていると、警察官が職務質問にやってくる。

警官1「こんにちはー。お兄さんさっきからこの辺りぐるぐるしてるみたいだけど、なにか捜し物でもしてる？」

一樹「ゲームしてんだよ」

警官2「どんなゲーム？」

警官1「ちよっと、ポケットの中見せてもらっていい？」

渋々ポケットの中のスマホを取り出して警官に見せる一樹。その画面には



万歩計を使ったゲームが映っており、  
一万歩歩くと孵化するモンスターの卵  
が、あと一步で孵化するところ。

一樹「やったことないんすか、ウォーキング  
・モンスターズ。みんなやってますよ。お。  
ちよ、ちよっと待って」

一步前に踏み出す一樹。モンスターが  
孵化する。

一樹「よっしゃノルマ達成。じゃ、どうも」  
上機嫌で去って行く一樹。

警官1「あ、ちよっと……お兄さん」

### ○島田組事務所

「ソウルハンター」の素材集めをやっ  
ている一樹。以前よりも上手くなって  
おり手際よくモンスターを倒していく。  
小野寺が画面を覗き込んで、

小野寺「はあ。慣れるの早いですねえ。自分  
なんか全然ダメで」

一樹「お前と一緒にするんじゃないよ。しか

し、こうなると自分でクエスト進めたくないな  
るな」

小野寺「いいんじゃないですか、進めて」

一樹「バカお前これ親父のデータなんだぞ」

岡崎「それじゃあ、健児と一戦交えてきたら  
どうですか」

一樹「なに健児もこれやってんの」

岡崎「いや別のゲームですけど、戦うやつだ  
から少しは氣い晴れるでしょう」

○ゲームセンター

格闘ゲームで健児と対戦している一樹。  
力量差は圧倒的で、何戦しても一樹は  
健児に刃が立たない。

一樹、立ち上がってゲーム筐体越しに  
健児に話しかける。

一樹「お前ゲームやりすぎなんだよ！」

健児「親父が練習しとけって言うんで」

一樹「クソ……もう一回！」

○ラブホテル（夜）

由美と一樹がレースゲームの対戦に没頭している。

由美「そろそろやる？」

一樹「負けたままゲーム終われねえだろ」

由美「いや、こっちはいいけどさ、逆にね？  
逆にこっちはいいけど、やらなかったから  
払い戻しとかはないからね？ 分かってる  
だろうけど」

ゲーム画面上で由美が一樹の車を追い抜く。

一樹「じゃあなぜ抜く！」

由美「ゲームはゲームだよ」

○家電量販店・外観

○同・ゲームフロア

ゲーム機を買うための長い列が出来ている。店員が整列のためにその周囲を回っている。

店員「すいません2列になってお並び下さい。  
すいませんソーシャルダンスを取っ  
てお並び下さい」

その列の中にスマホをいじっている隆  
の姿もある。

と、その前に並んでいたヤンキー風の  
男・瀧（26）の横に、仲間と思われ  
る別の男・瀬川（26）が割り込んで  
くる。

瀬川「結構待ってる？」

瀧「昨日に比べたらそうでもないな」

瀬川はそのまま列に入って、元々瀧の  
横に並んでいた気弱そうな男性客は  
一歩後ろに下がる。

それを見ていた隆。

隆「あの、すいません、割り込みおかしくな  
いですか？」

瀬川「え、なんですか？」

隆「いや、今あなた割り込みましたよね？」

瀬川「え、何がですか？」

隆「は？」

瀬川、無視して瀧との会話に戻る。

隆「テメエなめんなよコラ」

距離を詰める隆を瀬川は咄嗟に突き飛ばす。

隆、ブチキレて、今度は突進して瀬川を殴り倒す。馬乗りになって殴り続けていると、店員が駆け寄ってきて、

店員「お客様！？ お客様！！」

○島田組事務所（夜）

隆と岡崎が並んでソファーに座っていて、その向かいに座った一樹が尋問でもするかのように二人と話している。事務所内には小野寺と健児もおり、真面目な表情でアニメのクイズを出し合っている。

一樹「それでお前だけパクられたわけだ。

相手は一切おとがめなし」

岡崎「ガラが悪くても素人ですからね」

隆「すみません」

岡崎、隆を軽く殴って、

岡崎「出禁の店なんか作ってんじゃねえよ」

一樹「いいよ。でそいつらどこだ。どこに  
いんの」

岡崎「いや、カシラ」

一樹「（遮り）やられてやり返さねえんなら  
テメエなんで極道やってんだこの野郎！」

岡崎「すみませんでした」

小野寺が健児を怒鳴りつける。

小野寺「テメエ何度言ったら覚えるんだこの  
スットコ！ ジョニー・ライデンはアニメ  
本編には登場しねえってさっきから言っ  
てるじゃねえか！」

振り返って小野寺と健児を怒鳴る一樹。

一樹「お前らは何なんだよ！」

小野寺「あの、量販店が、転売防止策で限定  
プラモ購入希望者にアニメを見てないと分  
からないクイズを出すようになったんで。  
今、二人で勉強してるところでして……」

ため息を吐いて頭を抱える一樹。

と、水洗トイレを流す音がして、島田がトイレから出てくる。

一樹「親分。このまま黙ってるんすか。そこからへんのガキに舐められて。島田組の名折れですよ」

島田、ゲーム機の置いてあるデスクの前に座る。

島田「一樹よ。そりや気持ちわかるけれども、そんなことしても警察が喜ぶだけだろう。殴ってきたのが向こうでも殴り返したヤクザが悪い。健全なお仕事をしても給与振込先の銀行口座を虚偽申告で作ったヤクザが悪い。何をしたってヤクザが悪いんだよ。な？ ヤクザさえ取り締まることできりやあ他のあくどい連中には目をつむるんだから。報復なんておめえ、やったところで得にならねえよ」

一樹「損得なのかよ」

島田「なんだって損得勘定で動くのがヤクザ

じゃねえか。そうだろ？ なあ？」

他の組員たちの顔を見ていく島田。

組員たちは小さく頷くが、一樹だけは  
頷かない。

島田「そんなことより、手え空いてる奴は  
コントローラー握れ。今日は徹夜でゲーム  
やるからな」

組員たち「うっす」

○タピオカドリンク屋・外

信太郎が二人分のタピオカドリンクを  
買って、一つを一樹に渡す。

信太郎「はい」

一樹「おう」

二人はタピオカドリンクを飲みながら  
歩き出す。

信太郎「カズっちが言ってた例の二人ね、確  
証はないんだけど、まあ場所から言っ  
てアウターへブンっていう半グレの末端構成  
員か、ケツ持ちしてもらってる不良ってと



ころじやないかな」

一樹「半グレか」

信太郎「もうヤクザなんて怖くないからね。

とくに末端の奴は物を知らないから。平気でするんだそういうこと」

一樹「で、どこ行きや会えるんだよ」

### ○繁華街（夜）

瀧がガールズバーのキャッチをやっている。

瀧「お兄さんどうすか、ガールズバー」

道行く人々にやる気無く声をかけていくが誰も立ち止まらない。

瀧「お兄さん、女の子」

と、一人の男が立ち止まる。瀧が見ると、それは一樹。

瀧「すぐ案内できますよ。どうすか」

一樹、瀧の顔をまじまじと見て、それからスマホで何かを見る。

一樹「こっちじゃねえ方だったな。あの

さ、こいつんとこ案内してくれる？」

瀧にスマホを見せる一樹。そこには  
瀧川の写真が写っている。

瀧「え、誰ですか？」

一樹「誰ですかじゃねえだろ。分かってるんだよ。そいつがウチの連中に喧嘩売ってくれたみてえじゃねえか。お前は分かっているだろうな、島田組だぞこっちは」

瀧「いや……待って下さいよ、困ったな、勘弁して下さい、ヤクザの人と付き合ってる  
と店営業停止になっちゃうんですよ」

一樹「ああ！」

瀧「恐喝ですか……？ 警察呼びますよ？」

本当に、やめてください。ごめんなさい。

ごめんなさい」

半泣きになって頭を下げる瀧。通行人  
たちがチラチラと二人を見て、中には  
立ち止まる者もいる。

手を握りしめて震える瀧を見つめる

一樹。

○（回想）団地の一室・和室（夜）

一樹が8歳の頃の回想。

夫婦喧嘩で怒鳴り合う声が聞こえる中、  
一樹は布団にもぐってゲームボーイを  
やっている。

と、重い足音が突然近づいてきて、  
部屋の襖が荒々しく開いて、一樹は咄  
嗟にゲームボーイを抱えて丸くなる。  
男の手が布団を取っ払う。彼は一樹の  
実父である。

一樹の父「お前なにやってんだ。一樹。お父  
さん寝ろって言ったろ」

一樹の頭を何度も蹴り、叩き、その手  
からゲームボーイを奪い取る一樹の父。

一樹の父「寝ろって言ったろ！」

一樹、涙を浮かべながら、

一樹「ごめんなさい。ごめんなさい」

一樹の父は取り上げたゲームボーイを  
思いきり壁に投げつける。その破片が

飛び散りって、一樹の顔のすぐ横にも落ちる。

一樹の父「寝ろ」

一樹の父は部屋を出て行く。その後も、一樹は手を握りしめて、目をつむって謝り続ける。

一樹「ごめんなさい。ごめんなさい」

何か割れるような音と母親の悲鳴。

○繁華街（夜）

我に返った一樹、辺りを気にして、舌打ちをする。

一樹「悪いことすんなよ」

瀧「はい……すいません……」

去って行く一樹。

○繁華街から少し離れた道路（夜）

一樹があてどなく歩いているとスマホがバイブする。取り出して画面を見ると、「ウォーキング・モンスタース」

で新しいモンスターが孵化したところ。自パーティの画面に切り替えると、そこには高レベルのモンスターが三体並んでいる。名前は「おのーで」「おつかざ」「たかばか」。

と、「親父」からチャット通知が入る。その文面は「今暇か？」。

### ○島田邸・島田の部屋（夜）

デスクにインターネット副業やユーチユーバー収益化の手引き書が何冊か積みまれている。パソコン画面には作成中のプレゼン資料。

島田と一樹はテレビでレースゲームをしている。

島田「持ち回りでネット関係のシノギをプレゼンすることになってるんだよ。会長の発案だよ。何やってんだって思うよな」

一樹「これだってそう思いますよ」

島田「息抜きは必要だろうお前」

沈黙。

島田「宮仕えが嫌でヤクザになって、そこでやってることがシノギの資料作りとプレゼンじゃあな。案外、こうやってゲームに逃げてる時の方が俺の思ってたヤクザ暮らしと近いよ。お前はどうかだよ、え。何がやりたくてこの世界入った」

一樹「そりゃ、金持って、女抱いて、うまいもん食って……」

島田「古いなあ！ いつの人間だよ。戦後じやねえんだぞお前。昔のヤクザはよくそう言ってたけどさ、今21世紀だよ？」

一樹「でも自分の方が21世紀のゲームに適応してるみたいっすね」

レーズゲームで一樹が勝つ。

島田「あーあ、面白くねえな。やめだ、スーファミのマリカーやろう」

一樹「いやそれこそ古いじゃないですか！」

○ゲームセンター（夜）

格闘ゲームの店内対戦をやっている  
健児。挑戦者に圧勝して、その台の  
男が筐体を蹴りつける。

男「死ね」

それからトイレに向かう。  
健児は意に介さずプレイを続ける。

○同・トイレ（夜）

小便をしている男。その頭が突然背後  
から強く押され、壁に激突する。

男の背後に立っていた瀧が男を羽交い  
締めにして壁から引き離して立たせ、  
瀧川がその頬を何度も平手打ちする。

瀧川「ゲームセンターで暴れるなよ。他のお  
客さんが迷惑するだろ。筐体蹴るとか最低  
だぞ。次この店で顔みたらお前殺すぞ」

男、もがいて叫ぶ。

瀧川は慌てて折りたたみナイフを取り  
出すと、咄嗟に男の腕を切りつける。

男「いつて！」

男は怯えて大人しくなる。

瀬川はナイフをかざしながら、

瀬川「お前誰相手にしてるかわかってないだろ？ こっちのバツク島田組だよ？」

### ○島田組事務所

捜査員たちがダンボールを開けたり外へ運び出したりしているのを健児以外の組員たちが眺めている。

岡崎「だから関係ないって言ってるじゃないですかー。こっちも仕事があるんだから邪魔しないでもらえませんかねー」

捜査員の声「ありました！」

岡崎「たかが恐喝で何を隠すものがあるっていうんだよ！」

### ○警察署・取調室

健児が取り調べを受けている。

刑事「じゃあ、もう一回最初から話してもらっていい？」



健児「何回話せばいいの？」

刑事「本当のことを言うまで何回でもやるよ。ただゲームやってただけじゃないでしょ？ ヤクザなんだし」

健児、しばらく刑事を眺めて、それから掴みかかろうとする。

他の刑事が止めに入る。

### ○島田組事務所（夜）

ダンボールもゲーム機もパソコンも、元々あった商売道具はほとんど警察に運び出されてしまった後の、がらんとした室内。

そこに手持ち無沙汰の隆、岡崎がおり、小野寺は固定電話で弁護士と電話している。

小野寺「はい、はい。ああそうですか。了解しました、すみませんどうも先生、お手を煩わせまして。はい、失礼しますー」

小野寺、電話を切って、

小野寺「健児の勾留は期限いっぱい続くだろうが、まあ起訴までは持つてく要素もなし、今はこらえて待つてろつて」

岡崎「出たよ人質外交。あいつら」

デスクを蹴りつける岡崎。

小野寺「まあ、親父さんも同意見みたいですし、ここは耐えるしか」

隆「やれることをやるだけっすね」

デリバリー用のリュックを背負う隆。

岡崎「やれることつてチャリンコデリバリーかよ」

隆「上納金滞らせるわけにはいかないでしょう。こつちも食ってかなきゃいけないし」

岡崎「何が悲しくてヤクザがそんなことやってんだよ」

小野寺「隆、それ誰でもできるの？」

岡崎「おい！」

小野寺「すいません……」

○島田邸・島田の部屋（夜）

島田が佐竹、村瀬とビデオ会議をしている。

村瀬「まあ、警察がこつちを睨んでる時に、わざわざこつちから騒ぎを起こすことはねえやな」

島田「はい。そう思います」

村瀬「だがまあ、素人にテメエの組の名を騙られて、そいつが犯罪に関与したってんなら、会の沽券に関わるわな」

島田「はい」

佐竹「お前の組はお前の組だよ。俺は口出しはしねえけどよ、若いもん出すぐらいはした方がみんなハッピーなんじゃねえか？」

村瀬「市民のお役にも立てる」

佐竹「ヤクザのねえ、名を騙ってそこからで狼藉を働くなんて、そんな向こう見ずな連中は放つといたら何をしでかすか分かったもんじゃない」

村瀬「まあ、俺からはどうこう言わねえけどよ、お前もゲームばっかやってねえで、

そこんところよく考えないとな。じゃあ、  
そろそろ時間だから」

佐竹「ご苦労様でした」

島田「ご苦労様でした」

ビデオ通話を切る村瀬。

佐竹も切ろうとするが、そこに猫が飛び乗ってきて、そちらに注意を向ける。

佐竹「あーあーあー。シッ！ シッ！ おい

古賀！ こいつ檻に入れとけ！」

信太郎「はい」

画面に現れた信太郎に猫を投げつける  
佐竹。

佐竹「おいおいおい怪我させんなよ！ 会長  
のお前、お気に入りなんだから！」

信太郎「はい」

一旦はビデオ通話を切ろうとした島田、  
その手を止めて画面を見続ける。

佐竹はビデオ通話を切るのを忘れて  
ネクタイを緩め、画面外のソファーに  
座る。

信太郎「しかし、いいんですか？」

佐竹の声「なにが」

信太郎「場合によっちゃ組潰れますよ」

佐竹「ああいいんだよあそこは、どうせゲ-

ムやってるだけのオタク連中なんだから。

ヤクザの矜持ってもんをさ、見せつける後

押しをしてやったんだから、むしろ感謝し

てもらわなきゃおかしいじゃねえの」

タバコの火をつける音。なかなか点火

せず、信太郎が火を持って行く。

佐竹「あの半グレのガキどももこれで多少は

ヤクザの怖さがわかるだろ。西口の方で

いくらか取れるよ。あいつらガールズバー

持ってたよな？ お前に任せるから」

信太郎「はい、ありがとうございます」

島田、画面をじっと見つめて、それか

らビデオ通話を切る。

### ○同・庭（夜）

一樹が落ち着きなくタバコを吸ってい

ると、島田がやってくる。

一樹「どうなりました」

島田「おう、まとまったよ。ちよつとこれから向こうの連中と直接話してくるから」

一樹「え、じゃ自分も」

島田「いやいや、いいんだいいんだ。悪いけどよ、お前は素材集めやっといてくれ」

一樹「そんな時じゃないでしょう」

島田「バカ野郎お前が来たら場が荒れるじゃねえか。こりや商談なんだからさ」

一樹「損得ですか」

島田「そりやそうだろお前。それにさ、親は子供を好きに遊ばせてやるもんだろ。な」

外へ向かう島田。

一樹「車回しますよ」

島田「いい、いい。タクシー拾うから。いいからお前は部屋でゲームやってろ。クエストも適当に進めていいから」

不満そうな表情の一樹。

○島田組事務所（夜）

岡崎のスマホがバイブする。画面を見ると、チャットアプリの通知で、  
〈組長〉から「念願のユーチューバーデビュー？」の文字。  
小野寺と隆のスマホにも同様の通知が入る。

岡崎「なんだこれ？」

隆「あーそういえば、親父ゲーム実況見てるから、自分でもやりたくなっただんじやないですか？」

岡崎「今？　なんで今だよ。何考えてんだよまったく」

チャットの続きを読んでいる小野寺。

小野寺「怒られるからカシラには言うな、  
だそうですよ」

岡崎「そりやそうだろ。言ったらこっちまで殺されるぞ」

○島田邸・島田の部屋（夜）

一樹が「ソウルハンター」をプレイ中。  
と、スマホがバイブ。舌打ちしてプレイを中断すると、電話に出る。

一樹「なに」

信太郎の声「ああ、取り込み中？」

一樹「逆だよ。ある意味忙しいけど」

信太郎の声「だよな。あのさあ、俺からカズ  
うちにこう言うのもアレなんだけどさ、  
大人しく手え引いた方がいいんじゃないか  
なって思ってる。そっち得しないよ」

一樹「ああ？」

信太郎の声「言い訳は俺も一緒に考えるから。  
まあ誤魔化しっていうのも、渡世には必要  
じゃない。会長はああ言うけど」

一樹「何言ってるんだお前。何の話だよ」

信太郎の声「あれ、まだ島田のオジキから  
聞いてないの？ カズうちのことだから  
もうカチコミ行ってるかと思っただけど」

○住宅街に面する通り（夜）



島田がスマホのカメラを自分に向けて、ライブ配信しながら歩いている。配信画面には視聴者三人の表示。

島田「ちゃんと映ってる？　おーい。これ、視聴者三人ってお前らだよな？」

岡崎たちがチャットで挨拶する。「そうですねよー、見てますよー」「ユーチューバーデビューおめでとうございませう！」などの文字。

島田「ははは。最初から外配信か。ゲーム実況がやりたかったんだがなあ」

### ○島田組事務所（夜）

隆と小野寺がテーブルにスマホを立てて一緒に島田のライブ配信を見ている。興味なさそうにしている岡崎。そのスマホに一樹からチャット。「親父どこにいるか知ってるか？」。

岡崎の返信は「聞いてないですね」。隆と小野寺の見ているスマホ画面には

相変わらず歩いている島田の姿がある。  
島田「こういうのも面白いもんだな。世の中  
やってみりゃあ面白いものが沢山ある。

なあ急だけどな、組、解散しようと思うん  
だよ」

隆「え」

事務所の三人は驚きの表情を浮かべる。

島田「それで、この動画はアーカイブに残る  
から、警察にくれてやれ。テメエらがヤク  
ザの見せしめに躍起になってる間に善良な  
市民が犠牲になりましたよっつってな」

小野寺「おい、これ、親父さん何するつもり  
だ。今どこだこれ。今どこですか！」

隆「ボイスチャットじゃないんだから聞こえ  
ないですよ」

隆がスマホを手にとって配信画面に  
コメントを打とうとする。

隆「コメントオフにしてるな」

小野寺「悠長なこと言ってる場合じゃねえだ  
ろ！ おい行くぞとりあえず！」

隆「どこかなこれは」

小野寺「勘で探せよバカ野郎！ チャリンコ

配達員の勘があるだろ！」

隆「そっちが本業じゃないから」

小野寺と隆が事務所の外へ出て行く。

小野寺が顔だけドアから出して、

小野寺「（岡崎に）ここ、お願いします！」

岡崎は気を落として窓の外を見る。

### ○島田邸・玄関（夜）

急いで外に出ていこうとする一樹。

と、その背後から祥子が声をかける。

祥子「どこ行くの一樹くん」

一樹「すいません、急いでるんで」

祥子「あの人にゲームやっというって言われ

たんじやないの」

一樹「あの、姐さん、今それどころじゃない

んですよ」

祥子「ちよっと、それが親に対する態度なの。

子は親に従うもんじやないの。アンタどう

いうつもりなのよ」

沈黙。

一樹「親父さんが危ないかもしれないんです。

自分らのせいで」

祥子「だからなによ。あの人が自分で決めたことをどうして邪魔できるの。あの人があど  
うなるうがこっちは覚悟できてるよ、ヤク  
ザなんだから。アンタはね、言われた通り  
ゲームやってりやいいの。それがあの人  
の意志なんだから。そうでしょ」

戸惑いを浮かべて祥子を見つめる一樹。

### ○コンビニ・駐車場（夜）

瀧と瀬川が座って談笑していると、  
そこにスマホを構えた島田が来る。

島田「お、いたいた。お前らか」

瀧「はい？」

島田、スマホをしまうと、懐に手を入  
れて、

島田「一緒に遊ぼうか」

そこから無線ゲームコントローラーを取り出す。

キョトンとする二人。

島田、そのコントローラーで思いきり瀧の頭を殴りつける。

突然のことに目を丸くする瀧川。

島田は尚も繰り返しコントローラーで瀧を殴り続ける。

瀧「たすけ……たすけて……」

動揺した瀧川、咄嗟にナイフを抜いて、島田の腹を背中から突き刺す。ナイフは腹を貫通する。

### ○島田邸・島田の部屋（夜）

「ソウルハンター」をプレイしている一樹。

その表情が徐々に歪み、やがて涙を流し始める。

泣きながらプレイを続ける。

○コンビニ・駐車場（夜）

ナイフが突き刺さったまま地面に倒れ込む島田。怯えた顔の瀬川と瀧を見て、島田「大丈夫だよ。ヤクザに襲われての正当防衛だ。自首すりゃあ罪にはならんさ。自分らがどういう世界にいるかわかったろ」

血だまりの中で力なく笑う島田。

瀧と瀬川は糸が切れたようにその場から走って逃げていく。

血だまりは拡大していく。

○雑居ビル・外観

T…三ヶ月後

○同・共用部分

花束を手にした信太郎が階段を上がってきて、テナントのドアの前で立ち止まる。スマホで電話をかける。

信太郎「あ俺だけど。今ついた。うん外」

ややあって、中からドアが開き、小野

寺が出てくる。

小野寺「どうぞどうぞ、入って下さい」

信太郎「お邪魔しますー」

中に入る二人。

○同・元島田組事務所

事務所だったその部屋は、現在は中小  
IT企業のような内装になっている。

信太郎、室内を見渡して、

信太郎「おー、思ったより立派。あ、どうぞ  
これ、開業祝いってことで。あとカタギ復  
帰祝い」

小野寺に花束を渡す信太郎。

小野寺「どうも、ご丁寧にありがとうございます  
ます」

信太郎「すいませんね大したものじゃなくて。  
あんまり派手なものだとヤクザからは受け  
取りにくいと思っつて」

小野寺「そんなそんな、こっちだってヤクザ  
みたいなもんですから」

信太郎「しかし、随分賑やかですねえ」

小野寺「ええ」

室内を見て回る信太郎。小野寺が案内する。

eスポーツのスペースでは健児が格闘ゲームの練習をしている。

小野寺「ここはeスポーツの練習スペース。

今は大会で結構な賞金も出ますから、事業としてやってるんです。社長、健児をチャンピオンにしてやるんだって意気込んでますよ」

信太郎「ほお」

信太郎に軽く会釈する健児。

実況動画撮影スペースでは由美と薫がゲーム実況動画を撮影している。

小野寺「これはゲーム実況動画の撮影ですね。

弊社の主力タレントのお二人。チャンネル登録数は早くも100万人突破！」

信太郎「なるほど」

デスクの上に複数のモニターや資料の



置かれた雑然としたスペースでは岡崎が隆に説教している。

岡崎「いや他が拾えるものをウチが拾ってもしょうがないんだからさ。奇をてらえって言ってるんじゃないんで、それは本当に独自性を考えての企画なんですかって言いたいわけね。わかる？」

隆「はい、すいません」

岡崎「（信太郎に）こんにちは」

隆「ご苦勞様です」

小野寺「ゲーム関連のまとめブログとニュースサイトはここで二人が。大体いつもギスギスしてます」

岡崎「プロレスですよ、プロレス」

隆「ぶっちゃけ嫌な上司です」

小野寺「はい、ギスギスは後にしてください。で、こちらが……ま、見りゃあわかりますね。社長」

大画面モニターで一樹が「ソウルハンター」をプレイしている。

そこは様々なゲーム機や映画ソフト、  
オモチャの置かれた遊びのスペース。

一樹「（信太郎に）おう、とりあえず座れよ。  
なんかやる？」

信太郎、ソファーに座って呆れたよう  
な笑顔を浮かべる。

信太郎「はあ。人間変わるもんだねえ」

一樹「変わんねえよ。遊び方が変わっただけ  
だ。ムシヨじゃゲームできねえからな」

信太郎「それが変わったっていうんだよ」

曖昧に笑う一樹。

一樹「そうだ、ちょっとこれやってて。何か  
お菓子買ってくるわ」

信太郎「うん」

信太郎にコントローラーを渡して外へ  
出て行くこうとする一樹。

小野寺「あ、社長、自分行きましようか？」

一樹「いいよそういうの。お前誰だよ」

小野寺「えっ！」

## ○コンビニ・駐車場

お菓子の詰まったコンビニ袋を手にした一樹が店から出てくる。  
歩きながら、駐車場に微かに残る血痕に目をやる。

## ○住宅街・公園の前く公園

事務所に戻ろうと歩いていた一樹のスマホがバイブする。  
取り出してその画面を見ると、「ウォーキング・モンスタース」内で自動バトルが始まっている。

一樹「ようし、倒せ！ 倒せ！」

画面を見たまま公園に入ってベンチに座り、スマホ画面に見入る一樹。

と、誰かの視線に気付いて、隣を見ると、汚れた服を着た8歳ほどの少女が一樹を冷たい目で見ている。

一樹「……なんだよ」

少女「別に」

一樹「ああ、なんか、邪魔した？　悪いね、ほら、これやるから許せ。な」

一樹はお菓子を少し取り出して少女に渡そうとするが、少女は受け取らない。

少女「知らない人からもらえないでしょ」

一樹「なんなんだよお前、感じ悪いな。じゃ通報しろよ、変なおじさんがいるって」

少女「通報しても何もならないよ」

少女の目を見て何かを察する一樹。

一樹「じゃあ、ゲームやれ。ほら、これやっ  
ていいから」

スマホを少女に渡す一樹。少女はスマホを受け取って画面をじっと見る。

一樹「それちよつと難しいか……じゃあ、これは？　これ面白くない？」

別のゲームアプリに切り替えると、少女はゲームで遊び始める。

一樹はお菓子を食べながら少女のゲームプレイを見守る。

一樹「おー、うまいうまい……そこ難しいん

だよな……あ、やられちゃった……まあでも失敗して覚えるゲームだからなこれな」  
無表情だった少女の顔は、心なしか  
少し明るくなったように見える。

(了)

(200字換算…129枚)